

## 平成 10 年度研究功労賞推薦書

受賞者 稲永 和豊 先生

稲永和豊先生は昭和 21 年に九州帝国大学医学部を卒業された後に同大学院特別研究生に進まれ、昭和 26 年に満了されました。ただちに九州大学医学部精神科に進まれて文部教官助手に就任され、昭和 31 年には九州大学医学部附属病院講師に昇任しておられます。稲永先生の専門の研究分野は、大学院特別研究生以来現在も一貫して神経生理学と神経薬理学ですが、神経生理学のスタートは脳波の基礎的、臨床的研究であります。大学院特別研究生に在学中、先生は本川弘一教授(東北大学生理学教室)のもとでしばらく脳波の基礎的研究に従事されておられますから、脳波を用いた脳生理学の研究者としてはまさしくわが国のパイオニアのお一人であります。精神科に入局された先生は直ちに脳波研究室を創設され、脳波の研究を進める一方でてんかんの診断と治療の研究に従事されました。また、九州大学病院精神科の中にてんかん外来を創設され、てんかんの臨床的研究と治療法の確立に多くの功績をあげられました。九州大学精神科の脳波研究室には長い間、稲永先生が制作された 2 チャンネルの手製の脳波計が、草創期の研究室における先生の活躍を記念して保存されていたことを思い出します。

稲永先生は昭和 34 年に王丸勇教授の招請で、久留米大学精神神経科助教授に転任されました。ここでも先生は脳波の臨床的研究を精力的にすすめると同時に、在局の教室員や同門に対して脳波の記録と判読法を教育され、脳波検査の普及に尽力されたのであります。昭和 41 年に久留米大学精神神経科の教授に就任後は、その成果が臨床脳波入門(金原出版、ユ 968)、臨床脳波判読の実際(金原出版、1968)、機能的脳波学(医歯薬出版、1970)、脳波のよみ方(金原出版、1972)、フォローアップ臨床脳波アトラス(医学書院、1973)として次々に出版されました。また安楽茂巳久留米大学教授(久留米大学脳疾患研究所)との編著によるミオクローヌステんかん(医学書院、1974)は、臨床から生理、病理まで当時のこの疾患の最先端の知見を網羅しており、現在でも本疾患の研究者の必携の書であります。また、分担執筆者がすべて両先生から直接指導を受けた教室員であることは、故王丸名誉教授が教室の総力をあげて追求された脳疾患の臨床と病理の総合を、稲永先生が継承されたことを示しています。先生は昭和 63 年に久留米大学を定年で退職されるまでに多くの全国学会会長を務められましたが、てんかん関係では昭和 43 年に第二回日本てんかん研究会(後に日本てんかん学会と改称)を主催され、昭和 56 年 10 月から平成元年 9 月までは日本てんかん学会理事として学会の運営に貢献されたのであります。また昭和 60 年 11 月 3~4 日に福岡で開催された第 12 回日本てんかん協会全国大会では、委員長として手腕を発揮されて大会を成功裡に導かれ、これを契機に同協会福岡支部の基礎が築かれたのであります。

先生は久留米大学病院精神科においても外来部門にけいれんクリニックを発足させ、地

方でいまなお社会的偏見に悩むてんかん患者の治療に積極的に取り組まれました。てんかんに対する研究の功績に加えて、てんかん医療に対する先生の熱心な業績が日本てんかん協会によって評価され、昭和 61 年に同協会から木村太郎記念賞を授与されました。

先生は神経生理学や神経薬理学の基礎的な研究者としても多大の功績を上げられましたが、一方で大学における臨床教室の主任として自らてんかんを始めとする医療の前線に立ち、多くの精神神経科医を養成されました。その功績はまことに大きいものがあります。

久留米大学 名誉教授

中澤 洋一